

I はじめに

井上教授をはじめ、国学院大学日本文化研究所の皆さんに、第1回のシンポジウムにお呼びいただいたことを感謝申し上げます。それでは、発表をはじめさせていただきます。

1941（昭和16）年7月2日、神社精神文化研究所から依頼された柳田国男が、神道と民俗学を有名にした第一学期例会を開きました。開会に際し、柳田は次のように述べました。「神道と民俗学、斯ういふ大きな課題には準備も足らず、又時間も十分とは言へませぬ」（柳田 1943:5）。いまの私も全く同感です。準備も足らず、また時間も短い。

その例会で柳田は次のような発言をしました。「西洋の民俗学には……在来の神道史研究といふものは有りません」（柳田 1943:19）。この発言は、いまの発表者（私）には、少し違うのではないかと思います。同意できません。

例えば、戦前のオランダにおける神道研究の中身は、デ・フィッサー（M. W. de Visser）が、例として挙げられ、在来研究に基づく神道史研究が行われていました。現代のオランダの神道史研究はほとんど戦後に始まっています。

資料としてこの発表の中に引用し、分析する研究論文はオランダ語、あるいは英語、日本語で発表された学術論文です。また、西洋の文献と日本語の文献と両方の資料に基づく研究を選びました。これらの論文・出版物は、ほとんどオランダの出版社から出版されたものです。また、今回の発表は、学術的には民俗学・思想史・宗教学・神学、時間的には現代を中心にしています。

II オランダにおける神道の研究機関

まず、オランダにおける神道の研究機関についてお話しします。神道の研究機関には、大学と民族学博物館とがあります。大学は4カ所で、民族学博物館は6カ所あります。4カ所の大学のうち、キリスト教系の大学は2カ所で、アムステルダム（Amsterdam）とナイメーヘン（Nijmegen）とにあります。国立大学は2カ所で、ライデン大学（Universiteit Leiden）とユトレヒト大学（Rijksuniversiteit Utrecht）です。

1. キリスト教系の大学

キリスト教系の大学について述べます。アムステルダムにあるプロテスタント派の大学では、神道研究は、神学部で行われています。カトリックの大学であるナイメーヘン大学でも、神道研究は神学部の中で行われています。

2. 国立大学

国立大学では、ライデン大学とユトレヒト大学と両方で、神道研究は、文化人類学、日本学科、そして思想史の分野で行われています。文化人類学の研究で、多分一番優れている

るのは、コルネリウス・アウエハント (Cornelius Ouwehand) がまとめたものです。思想史・日本学科の方面では、テーウエン (Mark Teeuwen) の1996年の度会神道についての英語の博士論文があります。

3. 民族学博物館

①デ・フィッサー (M. W. de Visser)

次に、民族学博物館について述べます。ライデン国立民族学博物館では、神道研究は、学芸員、あるいは日本学教授によってなされました。その第一のものは、戦前、デ・フィッサーの研究です。デ・フィッサーは、ライデン国立民族学博物館の学芸員 (1910-1919; 1925-1927)、後にはライデン大学の日本学科教授 (1917-1930) を務めました。

デ・フィッサーは、明治の終わりごろ、大正時代に日本にも滞在したことがありますし、そのときに民俗神道—民俗神道という用語は折口信夫の概念かもしれませんが—を勉強しました。そして、オランダに帰ると『日本の宗教としての神道』という論文を1911年に発表しました。さらに1930年には、『日本の神道と道教』という論文を書いています。

②クリーガー (C. C. Krieger 1884-1970)

次は、クリーガーです。ライデン国立民族学博物館の学芸員で、昭和の初めごろの方です。彼は後に、国立ユトレヒト大学で日本学科教授を務めました (1935-1955)。クリーガーは、「日本の宗教 神道・仏教」という題で、神道についての一つの論文を出版しました。

③アウエハント (C. Ouwehand)

国立民族学博物館の学芸員のアウエハント教授は、昭和26年～昭和43年まで、ライデン国立民族学博物館の学芸員で、後にチューリッヒ (Zurich) 大学に勤務しました。

Ⅲ オランダにおける神道の学術的研究の内容

ここでは、オランダにおける神道についての学術研究の内容について、少しお話ししたいと思います。

1. 神学

①フライエ大学 (Vrije Universiteit Amsterdam)

まずは、神学から始めます。アムステルダムのフライエ大学—このプロテスタント派の大学から神学の博士号を与えられた者は牧師になるのですが—で、1962年に、神道に関する英語の博士論文が出版されています。著者は、韓国の学者、リー・クンサム (Lee Kun Sam) という人です。韓国釜山生まれで、キリスト教信者でした。リー氏の博士論文の序

には、第一パラグラフに神に、第二パラグラフで恩師・先生方に、そして第三のパラグラフで、ライデン大学日本学科教授フリッツ・フォス (Frits Vos) に対する感謝が述べられています。リー氏は、膨大な日本語文献を参考にしました。

②ナイメーヘン大学 (Katholieke Universiteit Nijmegen)

やはり神道の研究が神学部で行われているカトリックのナイメーヘン大学では一ここで博士号を与えられた者は、聖職に入るのですが一、博士論文は2つ提出されています。

1つ目は、1967年のカムストラ (Jacques Henri Kamstra) の論文です。仏教を中心にした論文で、神道についての言及は一部です。カムストラは聖職に入りましたが、後に聖職を辞めて、アムステルダム大学の比較宗教学部教授になりました。その間に、日本の民間信仰の入門書や、あるいは『伏見稻荷信仰』という書物を発表しました。1990年代です。

もう1人はベルギー生まれのピレンス (Ernestus D. P. F. Piryns) です。彼は1971年に博士論文を書いて、ナイメーヘン大学にオランダ語で提出しました。この論文も仏教と儒教を中心にした研究で、神道についての言及は一部のみです。ピレンスは、1957年～1959年の2年間だけ、日本に滞在しました。多少の日本語文献も含みますが、文献のほとんどは、西洋の文献でした。この論文の主要テーマは、「なぜキリスト教が日本に浸透しないか」という問題でした。

2. 思想史

もう1人のオランダ人が、神道に関する博士論文を書いています。その博士論文はアメリカのコロンビア大学より博士号を受けました。著者は、クレーマス (Wilhelmus H. M. Creemers) です。博士論文は1966年に提出され、ライデンの出版社 Brill より1968年に英語で出版されました。「戦後神社史」というテーマを扱っています。

オランダで一番優れた神道関係の研究者は、多分、テーウエンです。彼は、平成8年に博士論文を書いて博士号を受けました。度会神道についての英語の論文です。テーウエンはオランダを出て、いまノルウェーのオスロ大学の教授です。

ライデン大学の中にもボート (W. J. Boot) という学者がいて、ボートの論文も1988年に、英語と日本語とオランダ語で出版されました。

③ミンゾク学 (民俗学、民族学)、文化人類学、日本学科、物質文化

学問的・専門的な分野から考えると、オランダにおける神道研究は、ミンゾク学の分野でなされています。ここでのミンゾク学というのは3つの意味があります。1つは、民俗として「folklore」。もう1つは民族、すなわち「ethnology」。もう1つは、文化人類学・社会人類学の分野から出ます。これに加えて、日本学科、そして物質文化の研究もあります。

ここで、戦前 (1910-1919; 1925-1927) のライデン大学・ライデン国立民族学博物館の学芸員・日本学教授であったデ・フィッサーの神道研究をちょっと紹介したいと思います。

彼の書物は、『日本の宗教としての神道』と『日本の神道と道教』という本です。『日本の神道と道教』は3部からなります。第1部の内容は「神道の神々」で、神体・自然神・神として祭られる天皇・神として祭られる生き物と使者、氏神・八百万の神々についてです。第2部は、「神社、神主、祭司」と題し、参拝者、巡礼者・神主・神道祭祀などの課題について書いています。第3部は、道教について書かれています。

ミンゾク学者としては、アウエハントが1964年に博士論文を英語で発表しました。その論文は、1979年に日本語訳で出版されています。アウエハントは、はじめ、柳田国男の民俗学研究所で研究し、スサノオについて論文を書きました。この論文は、1958年～1959年に、『モニュメンタ・ニッポニカ』(*Monumenta Nipponica*)に英文で発表されています。「スサノオ論 覚書」という題のこの論文は、1979年にせりか書房から翻訳された『鯰絵』という書物にも収録されました。

『鯰絵』の日本語のタイトルは、『鯰絵—民俗的想像力の世界』というものです。この本は、日本の当時の学会に、「面白い」という印象を与えました。何が面白かったのでしょうか。面白かったのは、新しい解釈を行っていたからです。彼は、スサノオに対しても鯰男に対しても、トリックスター論を使って理解しました。ライデン学派の構造主義からする分析も新しいものでした。『鯰絵』は、同志社大学時代の竹田聰洲先生の指導によって、日本語への翻訳プロジェクトが行われました。翻訳者は、その当時はまだ若い研究者であった小松和彦・中沢新一・飯島吉晴・古家信平の4人でした。

鯰絵に関するアウエハントの研究は、いろいろな日本の専門家からディスカッションが行われてきました。一つの例をあげると、「座談会 鯰絵の世界—都市民俗学の可能性を探る」という題で、アウエハントと、それから谷川健一先生、宮田登先生が座談会を行っています。書評では、例えば大林太良やその他の学者も、研究を紹介しました。

アウエハントは、チューリッヒ大学に勤めており、鯰絵の研究は、大体が文献研究・物質研究でした。続いて、アウエハントさんはいまも生き残る民俗宗教と儀礼の研究をしています。柳田国男先生と、馬淵東一先生が指導した地域調査研究に行なっています。その内容はいろいろですが、年中行事や農業儀礼、稲荷信仰などのテーマに絞り、『波照間』(*Hateruma*)というタイトルで一波照間というのは、調査地の名前ですが一ブリル出版会から1985年に出版されています。この本も日本の専門家から、書評などでよくとりあげられました。例えば伊藤幹治先生(1986)です。

IV 主な研究者と研究分野

思想史

主な研究者と研究分野については、初めに思想史をとりあげます。まず、60年代には、先に述べたクレーマスの『戦後神社史』(*Shrine Shinto after World War II*)があり、80年代になると、ヒルケマ・フォス(Naomi Hylkema-Vos)の加藤玄智についての研究が始

まりました。1990年代には、テーウエン、ファン・デ・フェール (Hendrik van der Veere)、ポートが、中世・江戸時代における神道、文献・思想・儀礼などの研究を行っています。

なかでも、ポートは、非常に面白い課題、近代日本における神格化、とくに徳川家康について研究しています。ポートは、次のように述べます。「古代・中世には……その数は少ない。……江戸時代になるとその数が増え、生き神信仰も行われるようになった。……明治時代になると、死者のための神社を建てるのが流行となった」(Boot 2000:144)。ポートは、それは、新しい現象という解釈をしています。彼は、例えば、平安神宮・明治神宮・乃木神社・靖国神社などは、新しい現象だったと解釈します。ポートの考え方では、そういった神格化は、現代 (Modern Times) の現象なのです。

V 盛んな研究分野

オランダで盛んな研究分野は、神学を別にすれば、思想史と宗教学とミンゾク学の研究領域といってよいでしょう。古代文献研究 (ポート、テーウエン)、人神・人間の神格化の研究 (ポート、ファン・ブレーメン)、神社神道 (クレーマス、ファン・ブレーメン)、民俗神道 (デ・フィッサー、アウエハント、ファン・ブレーメン) などの分野が主な研究課題となっており、古代と近代、そして現代に焦点をあわせた資料の研究を行っています。

VI オランダにおける新しい神道研究

次は、私をはじめとするオランダにおける新しい神道研究について述べます。この新しい研究の資料と課題は、1) 英霊という概念・英霊に関する儀礼・信仰・崇拝・物質的象徴 (忠魂の碑など)、2) 招魂社・護国神社、3) 人間の神格化・人霊・生き神信仰・軍神、4) 戦時下および戦後の英霊に関する神道的民俗儀礼・信仰、などを含みます。

その研究の枠組みと分析は、国学院大学の小野祖教先生の研究を参考にしています (小野:1968)。小野先生は、1) 祭り型から見た神道、とくに民俗祭祀 (小野 1968:15)、2) 神の種類一人の靈魂を祭った神の種類 (小野 1968:16)、3) 「祭り」の意味—儀礼に表現される「祭り」・「祭る者」と「祭られる者」との関係、そして「神秘の要素」「不思議な力」「助け合う力」等と名づける現象、「祭る者」と「祭られる者」との間に働く力があるという信仰と経験を分析枠組みとしてあげています (小野 1968:18-19)。

結論

結論として、一点だけ指摘したいと思います。それは、異概念同士での神道研究は困難であるということです。

私がここで選んだオランダの博士論文の提議 (stellingen; propositions) には、一つの共通点が見られます。いわゆる「自民族中心主義」 (ethnocentrism)、あるいは、「オリエンタリズム」などの現象です。「ポリティカル・コレクトネス」 (Political Correctness) に対する注意喚起が必要となります。

このような考え方は、学術的観点から見ると、方法論的・解釈的に大きな問題であると思います。自民族中心主義的な意見・結論は、宗教系大学の博士論文にも国立大学の博士論文にも共通する問題です。つまり、神学にも日本学にも、思想史にも、ミンゾク学にも、同様の提議 (stellingen; propositions) が見られます。地球規模を目指す国際研究に、自民族主義が大きな問題として残ることに注意を喚起したいと思います。

また、神道研究は、日本在来の神道研究に基づかなければなりません。今回の発表に引用し、分析した研究は、オランダ語、あるいは英語で発表した学術論文です。その中から、西洋語と日本語の資料や研究に基づく論文しか、選んでいません。つまり、ある文化を研究・理解する為に、地元の言語が分からなければならないということです。

以上で、私の発表を終わらせていただきたいと思います。

質疑応答

【司会】

ブレーメンさん、どうもありがとうございました。オランダの研究は、英語で出されているのだとわれわれも知りうるわけですが、オランダ語で出版されているものだと、日本人はなかなか直接アクセスできる機会が減ってしまいます。その辺りも考慮して紹介していただきました。

それでは、第1セッションと同じような形で質疑応答をしたいと思います。どなたからでも結構ですので、挙手をお願いいたします。

【平野孝國】

新潟大学の平野です。私はライデン大学に留学しまして、そこではP・E・デ=ヨセリン=デ=ヨング (P. E. de Josselin de Jong) という先生のもとで文化人類学を勉強しました。

アウエハント先生の研究を、そういう意味で、非常に構造主義的な考えに則って、日本の山の神というのや、先ほどおっしゃったスサノオなどを一緒にして研究されたのですが、ご自分でもあまりにも図式的過ぎるということに気が付かれて、あの本そのものは、ご自分ではあまり評価されなかったような形になったかと思います。

【司会】

このコメントに対して、ブレーメンさん、いかがでしょうか。

【ブレーメン】

ライデン構造主義は、インドネシア研究として日本に入りました。戦争中にも、馬淵東一さんがオランダの構造主義を慣習法の研究のもとに、紹介しましたね。多分その研究のおかげで、日本の文化人類学は、構造主義を早く理解したのあるのではないかという印象が私にあります。

もう一つ、ライデン学派には、ウィーン学派に対する対抗があったかもしれないです。例えば、アウエハントは、先ほども出たリーの論文を批判しています。リーはキリスト教から考え、そしてウィーン学派のヴィルヘルム・シュミット (Wilhelm Schmidt) から考えました。そして、その論点は、日本の神道の最高神は、非常に漠然とした太古からの記憶によっているというものでした。アウエハントは、その解釈はウィーン学派のヴィルヘルム・シュミットの最高神の説から考えたもので、神道にはあたらないと説明しました。それは、自民族中心主義の観点から考えた神道の解釈だったのです。

【司会】

ありがとうございました。では別の方の質問に移りたいと思います。

【新田均】

皇学館大学の新田と申します。先生のお話のなかに、ヒルケマ・フォスとか、テーウエンとか、皇学館大学に留学していた人たちが出てきたのは、大変嬉しく思いました。お伺い

したいのは、最後のところで、オランダに共通する問題点として、「自民族中心主義」と「オリエンタリズム」という言葉が出てきましたが、もう少し詳しくその辺を教えてくださいたいと思います。

【ブレーメン】

例えば、先に申しました例です。神道は、キリスト教の観点から理解することはできない、それは無理だと思います。西洋の宗教学的な観点から理解するとか、キリスト教的な観点から理解するとか、それでは本当に日本の文化、神道の理解はできない。それは、一つの共通点として明確です。

【新田】

確認したいのですが、共通しているのは、キリスト教の観点から解釈をするのは無理だという論点が共通なのか。キリスト教の観点から見ているので、先生のご判断として無理だという判断になるのか、どちらかなのでしょうか。

【ブレーメン】

私がそう考えているとお答えします。でも、一般的な考え方にもあると思います。日本学の中に、宗教・神学以外のもの、そういう考え方がある。しかし、神学の中にも、そういった理解は無理だという論題があります。例えば、ピレンスの一つの論題もそうだと考えましょう。彼は、「キリスト教の伝道に際し、メッセージを、非西洋用語に翻訳する問題だけではなく、その対象になる人々の全文化的背景とともに、その宗教的認識にもかかわらなければならない」と述べています。すなわち、牧師達とか、聖職に入った人たちが、なぜ日本では、キリスト教が普及しないかとか、そういう考え方からでは、神道はわからないのではないか、という論点です。—答えになっていなかかもしれませんが。

【飯田剛史】

いまのご質問と同じ趣旨ですが、エスノセントリズムは重要な問題ではないかと思います。日本人が神道を知る場合でも、逆の意味でのエスノセントリズムが—国粹主義ですけれども—あるのではないか。それも今後の論点になるのではないかと思います。いかがでしょうか。

【ブレーメン】

その分析のために、学問から生まれた概念も使わなければなりません。初めは文化人類学的な立場かもしれませんが。しかし、当事者の考え方、見方、概念から出発して、最後には、そのうえで、学問的な概念を使って分析するのが私たちの仕事です。

【関一敏】

九州大学の関です。柳田国男が、大正7年に、『神道私見』論争というものを国学院の河野省三としております。その中で、柳田はちょっと勇み足で、国学者・神道家たちというのは民間行事を一切無視しているのではないか。そこにこそ神道の魂があるのであって、単なる一家言の群れを神道教説と各自が勝手に言っているだけだ、というふうに言う。これに対して河野が、国学の伝統の中には、そういうムラの行事を踏まえたものがあるではないか、とたしなめています。これは非常に実りのある論争だったと思います。ただ、柳田

自身は最後まで基本的に、いわゆる神道教説は群れとしてあるけれども、キリスト教的な形で全体を傘のように覆っていない、勝手なことをみんな言っているのだということは、晩年まで一貫しています。

戦後になって、民俗学 (folklore) が半ば科学的な立場に立って、自分たちで自分たちの文化を、ムラの行事を再解釈していくのだという決意を、「新国学」という大変な言葉を使って表明したわけでした。

ここからが本題で、「新国学」というのは、歴史的にはエスノセントリズムということになってしまうのだけれども、実は日本の近代史が味わってきたような外からのさまざまな知的・政治的・経済的・心理的圧力の中では、日本の学問を立てていく際にはどうしても必要なエスノセントリズムだったというふうに理解しております。

そうしますと、いまの先生のおっしゃる立場はあまりにも西洋的に受け止められます。ムラ的な、フォークロア的な研究と、いわゆる国学的な、あるいは神道教説の研究は、日本でもなかなか折り合いがつかない。オランダにおいては、この部分はどうなっていますか。つまり、オランダのほうから見た神道研究というものは、どちらに比重があるのでしょうか？

と申しますのも、オランダの視野から日本を研究される際に、たまたま「神道」というものが自分の研究分野の現象として、後からやってくるのではないかという印象が強いのです。つまり、「神道」というものを媒介としないと日本研究ができないという方法的な視点から「神道」を研究するということはあまり必要ないのではないかと。

先生に対するご質問だけをもう一度繰り返します。神道教説を研究する側と、民俗学的な研究と、これがオランダでは一つの「神道研究」としてみなされているのか。日本では少なくとも、大卒の「神道研究」とはみなされているけれども、内部の対話はあまり成り立ちにくいのではないかと思うのです。

【ブレーメン】

オランダの学者は数が少ないですね。だから、その4・5人の意見が代表的かどうかは、わからない。また、神道研究専門家は、テーウエン以外、いないかもしれない。神道は歴史が長く、複雑なもので、宗教的・文化的、いろいろな側面があります。

だから、物質的研究—神社とか、儀礼的な道具とか忠魂の碑とか、そういう形で、大体国立博物館の人たちが研究しているアプローチや、あるいは地域調査として、村に行ったり、町に行ったり、都会に行ったりして意見を聞くことも必要でしょう。

オランダの日本研究の中には、古典文学などには非常に偉い研究者がいる。私がやっているいま現在の文化人類学的研究は、あまり日本学にはならないという意見があると思います。古典文学を読める人を使わないと本当の日本研究ではない、—それは一つの意見です。一方では、民俗学の観点からは、民俗学が日本純粹の研究ではないかという意見もあります。

【司会】

関さんの質問はあまりにも大きくて、オランダの研究者の数からいうと、多分、それに

対応するような答えを見つけるのは、ブレーメンさんとしては難しいというところだと思います。ただ、投げかけられた問い自体は、今後の神道研究にとっては、あるいは国際的な視点からも、大きな問題なので、これは最後の総括討論で、一つのテーマということにさせていただけたらと思います。

これで、第2セッションをこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

参考文献

- Boot, W.J. 「徳川家康の神格化をめぐる」『日本教育史論叢』 京都 思文閣、1988:417-435
- . *De dood van een shōgun. Vergoddelijking in het Vroeg-moderne Japan.* Oostersch Genootschap in Nederland 16, Leiden: E.J. Brill, 1989.
- . “The religious background of the deification of Tokugawa Ieyasu,” in: Adriana Boscaro, Franco Gatti, and Massimo Raveri, eds., *Rethinking Japan, Vol. II.* Sandgate, Folkestone: Japan Library, 1991: 331-337.
- . “The death of a shogun: deification in early modern Japan.” In: *Shinto in History Ways of the Kami.* Eds. John Breen and Mark Teeuwen. Richmond, Surrey, Curzon Press, 2000: 144-166.
- Creemers, Wilhelmus H.M. *Shrine Shinto after World War II.* Leiden: E.J. Brill, 1968. XVIII, 261 p.
- . *Christianity in search of roots: the Dutch province of the Friars Minor and the mission in Japan.* (Transl. from the Dutch). Utrecht: Provinciale Dutch Franciscans, 1995. 72 p.
- Hylkema-Vos, Naomi. “Katō Genchi, a neglected pioneer in comparative religion,” *Japanese Journal of Religious Studies* 17-4, 1990:
- Kamstra, Jacques Henri. *Encounter or Syncretism. The initial growth of Japanese Buddhism.* Leiden: E.J. Brill, 1967. 505 p.
- . *De Japanse religie. Een fenomenale godsdienst.* Hilversum: Gooi en Sticht, 1988. 136 p.
- . “Some aspects of Inaru, the god of Fushimi Inari in Kyoto,” in: Adriana Boscaro, Franco Gatti, and Massimo Raveri, eds., *Rethinking Japan, Vol. II.* Sandgate, Folkestone: Japan Library, 1991: 324-331..
- Krieger, C.C. De Godsdiensten van Japan. Het Shintō. Het Boeddhisme. In: *De Godsdiensten der wereld.* Prof. Dr. G. van der Leeuw e.a. Amsterdam: H. Meulenhoff, 193?: 473-495.
- . The infiltration of European civilization in Japan during the 18th century / by C.C. Krieger. - Leiden : Brill, 1940. - X, 125 p. : 25 cm [These] Leiden. [Traduction partielle de l'ouvrage Shinsen Yogaku nempyo, par Otsuki Nyoden (Tokyo-Osaka 1927).]. Proefschrift Leiden 1940 (check dag en maand; promotor)
- . Het Zen-Buddhisme en zijn invloed op de geest van Japan / door C.C. Krieger. - Leiden: Brill, 1948. - 31 p. Inaugurele rede Utrecht.
- Lee, Sam Kun. The Christian Confrontation with Shinto Nationalism. A historical and critical study of the conflict of Christianity and Shinto in Japan in the Period between the Meiji Restoration and the End of World War II (1868-1945). Amsterdam: Van Soest, 1962. 210 p. Doctoral thesis, Theology, Vrije Universiteit Amsterdam, defended on Friday 13 July 1962.
- Ono, Sokyō. “The concept of *Kami* in Shinto.” Proceedings of the Second International Conference for Shinto Studies, Kokugakuin Daigaku, 1-4 June, 1967. Tokyo: Kokugakuin University, 1968: 11-15.
- 小野祖教「神道の神概念」『持続と変化』 第二回 神道研究国際会議紀要。國學院大學日本文化研究所。昭和 43 年 : 15-19.
- Ouwehand, Cornelius. “Some Notes on the God Susa-no-o.” In: *Monumenta Nipponica*, Vol. XIV, Nos. 3-4, 1958-1959: 384-407.
- コルネリウス・アウエハント「スサノオ論 覚書」『鯉絵—民俗的想像力の世界』 東京 せりか書房 1979:383-411 (原論文 1958-1959)

- Ouwehand, Cornelius. *Namazu-e and their themes. An interpretative approach to some aspects of Japanese folk religion*. Leiden: E.J. Brill, 1964.
- . “De Japanse volkskultuur” In: *Panorama der Volken Deel II - Volken van Azi*, P. van Emst (red). Roermond en Maaseik. J.J. Romen & Zonen, 1965: 137-166.
- . *Namazu-e. Minzokuteki sōzōryoku no sekai*. Komatsu, K., Nakazawa, S. Iijima, Y. & Furuie, S. (transl.), Tōkyō: Serika Shobō, 1979.
- コルネリウス・アウエハント 『鯰絵—民俗的想像力の世界』 東京 セリカ書房 1979.
- Ouwehand, Cornelius. Bookreview of H. Okano, *Die Stellung der Frau im Shintō etc.*, 1976. In: *Numen*, Vol. XXVI, Fasc. 2, 1979: 258-261.
- . *Hateruma. Socio-religious aspects of a South-Ryukyuan island culture*. Leiden: E.J. Brill, 1985.
- . “Haterumajima no shakai-shūkyōteki kōzō wo megutte.” In: *Jinbun Gakuhō* (Journal of Humanistic Studies), No. 62, 1987: 131-146.
- . “Religie in Japan.” In: *As the twig is bent ... Essays in honour of Frits Vos*, Erika de Poorter, Ed. Amsterdam: Gieben, 1990: 155-169.
- Piryns, Ernestus Dionysius Paulinus Franciscus. *Japan en het Christendom: naar de overstijging van een dilemma*. Proefschrift Katholieke Universiteit Nijmegen, 1971. 2 dl. Tiel: Lannoo.
- Teeuwen, Mark. *Watarai Shintō. An intellectual history of the Outer Shrine in Ise*. Leiden: Leiden University, CNWS Publications Vol. 52, 1996. 471 p.
- . “The kami in esoteric Buddhist thought and practice.” In: *Shinto in History. Ways of the Kami*. Eds. John Breen and Mark Teeuwen. Richmond, Surrey, Curzon Press, 2000: 95-116.
- Teeuwen, Mark J. and Hendrik van der Veere. *Nakatomi Harae Kunge. Purification and Enlightenment in Late-Heian Japan*. München: Iudicium verlag 1998. (Buddhist studies ; 1) 118 p.
- I. Introduction II. Annotated translation III. Discussion IV. Conclusion
- Teeuwen, Mark and John Breen (Eds.) *Shinto in History. Ways of the Kami*. Richmond, Surrey, Curzon Press, 2000. 368 p.
- Teeuwen, Mark and Fabio Rambelli. *Buddhas and Kami in Japan, honji suijaku as a combinatory paradigm*. RoutledgeCurzon. January 2003.
- Visser, M.W. de. *Shinto, de godsdienst van Japan*. Baarn: Hollandia-drukkerij: 1911. Groote godsdiensten, deel 1, no. 1. 48 p.
- Visser, M.W. de. *Shintō en Taoïsme in Japan*. Amsterdam: H.J. Paris 1930. 83 blz. 39 illustrations.
- 柳田國男 『神道と民俗学』 東京 明世堂書店 1943.